

牧草利用による養豚

兼子達夫

緑草を主飼料とする養豚に关心が寄せら
れてから、農家の養豚熱が最近急激に高ま
りつつあるが、これは、常に問題となつて
いた飼料費を軽減する画期的な解決策とし
て、当然のことであろう。

諸外国においては、ずっと以前から牧草

土壤を舐食し、極めて健康によい。

煮沸の不要。

7 牧草栽培により畠土の地力増進。
右に挙げたように種々の点で有利であ
り、特に牧草の利用によって飼料費を節減
できること、即ち牧草が最も廉価な飼料で
調したい。

最も廉価な飼料

の生産費の大部分を占め、飼
料安くするかが、養豚の巧拙の
のであるが、その飼料費を
と第一表の通りである。即
用に使用されている濃厚飼料
給できる粕飼料について、單
格と一飼料単位(FE)当たり
たものである。

F(E)は、飼料の価値を示す
価値或は可消化総養分量と同じ
あり、第一表により、赤クロ
トップサイレージが極めて廉
であることがわかる。今かり
を赤クロバーで、他の五割を
とすれば、飼料費は、米糠だ
場合の約二割五分節減できる

現在、豚の飼料は、一飼料単
位が約三十三円となっており、
費を節減できるわけで、現在
に止めることができる計算と
赤クロバーは一飼料単位当
蛋白含量が多いから、肉豚飼

つてくるのは当然である。少くとも飼料の
50%を飼料園で確実に収得できるよう
に計画を立てることである。そして年間を通
して間断ないよう、特に冬期間のために
馬鈴薯サイレージ等の調整に合理的な栄養
配分を考慮しなければならない。

また、飼料の種類はなるべく多種多様に
亘るのが好ましく、偏った組合せは避け
て、四種類か五種類の配合を計画すべきで
ある。

次に牧草を栽培するに当つて、種々の作物
の中でも、豚にはどのような草がよいのか
を述べよう。

育上非常に好都合なのである。
では実際に、どのようにして、牧草を給
与して行けばよいのか。

牧草を組入れた飼料計画

養豚飼料を確実に安く得るために飼料
園を設定して、自給飼料の確保を行わなければ
ならない。そのため、先ず豚の一年
間に必要な飼料量を調べてみると、大体第二
表に示す通りである。従つて第二表の条件
に合うように飼料の組合せを作ればよいわ
けで、牧草を中心にして考えてみると、第三
表のような給与例が挙げられる。

給与例はそれぞれの地方に適応した考
えで、更に有利な組合せが得られようし、
その地方の営農状態によっていろいろと異

第1表 主な養豚飼料の価格と栄養価

飼 料 名	乾物量	1F(E) 当たり価格	1F(E) 当たり要る	1F(E) にすす量	中性可消化蛋白質	の純質	備 考	
							%	米糠 麦糠
粗 飼 料	薯 薯	25	4.45	20.0	4.5	25.0	5% 添加 10% 添加	米糠 麦糠
	鈴 鈴	40	8.00	18.4	2.3	20.7		
	馬 磨 碎 サ ピ バ イ ク ロ レ ポ	15	2.00	12.0	6.0	100.0		
濃厚飼料	赤	17	1.50	10.5	7.0	145.0		
	米 糜	86	20.00	20.0	1.0	90.0		
	脱 脂 乳 豆	86	25.00	31.3	1.3	140.0		
		9	6.60	39.6	6.0	190.0		
		87	55.00	44.0	0.8	230.0		

第2表 豚の飼料所要基準量表

	繁殖豚 年間の 所 要 量	1頭 の 飼料 量	肉 豚 (8 カ月) 所 要 量	1頭 の 飼料 量
普 通 配 合 飼 料	1,500	400		
内 飼 料 単 位	1,100	350		
可 消 化 細 蛋 白	100	30		
可 消 化 細 飼 料	1,000	300		

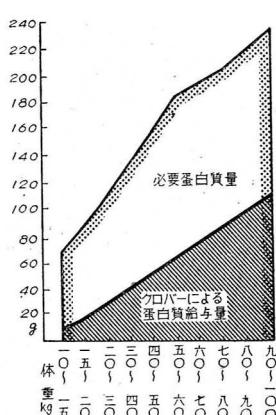
註) 1 繁殖豚は体重 200 斤、年 2 回分娩、仔豚 15 頭育成の場合。
2 肉用豚は生後 60 日哺乳し、離乳後 6 カ月体重 100 斤まで育成の場合。
3 この配合飼料の蛋白含量は仔豚 15%、中豚 13%、成豚 11% のもの。

この事は、牧草の栄養成分の点から最も好ましい刈取時期である。出穂あるいは開花し、葉茎が幾分粗剛になつてからでは、豚は大部分を食い残し、また過量の纖維は消化吸収力を減退せしめる結果となる。豚は他の草食動物等に比べ纖維の消化力が著しく劣つてゐるからである。

アテノクロバード
と養豚

豚は生後二ヶ月でラデノクロバーを採食する能力をもち、体重の約一割程度の草を消化吸收することができ、その後生育するに従つて、一層採食・消化力を高めるようになる。但し、仔豚に給与する場合、仔豚が発育不十分の状態の時には下痢を起すことがある、後の発育に影響するから、少しずつ給与して行くことが大切であり、特に体重一〇kg未満の時には多量に与えない方がよい。そして仔豚の場合では、ラデノクロバーを草切機で切断して給与した方が、食い残しが少く、繊維の塊を团子にして口外に出すことも少く、早く慣れさせることができる。

ラデノクロバーの収量は他の種三倍程度
あるものであるが、大体八回刈れるとこ
ろでは一頭当たり二〇坪、六回刈りのところ
では二五坪位あれば、一頭の豚を離乳期か
ら五ヶ月間飼育できる。勿論、栽培管理、
土壤条件によつてラデノクロバーの収量は
著しく異なるものであるから、牛糞または肥料
料の追肥更に暑熱時の撒水設備等をして肥
培管理を十分に行えば更に面積を縮小する
ことができる。



第一回 蛋白質必要量とクロバーによる

用いられている。特にラデノクロバーの利用は盛んなので、ラデノクロバーについては又後でのべるが、赤クロバー、ルーサンを給与する場合には、開花前に刈取り、なるべく刈取回数を多くして給与することが大切である。**オーチャードグラス、青刈麦類** 玉蜀黍など禾本科牧草も若く甘味のあるうちに与えれば好んで食し、全然食い残さない。一般に、どの作物も一尺以内の軟い中に刈取つて給与することが秘訣で、

欲を増進し、内臓器官とくに盲腸の発達を促すものである。

ラデノクロバーは寒暖何れの気候にも適し、土壤条件の適応性も極めて広く、大体六回～七回の刈取ができ、隨時に必要な量ずつ刈取れること、また放牧に最も適した草で放牧養豚を行いうることの二大特性を有している。年間の反刍生草収量は寒地でも二、〇〇〇～三、〇〇〇貫、暖地では四、〇〇〇～五、〇〇〇貫にも及んでいる。

第一図 蛋白質必要量とクロバーによる蛋白質給与量

ラデノクロバー採草地の所要面積は、その地方の地力と刈取回数によつて相当開きと第一図のようになる。

のあるものであるが、大体八回刈れることでは一頭当り二〇坪、六回刈りのところでは二五坪位あれば、一頭の豚を離乳期から五ヵ月間飼育できる。勿論、栽培管理、土壤条件によつてラデノクロバーの収量は著しく異なるものであるから、牛尿または肥料の追肥更に暑熱時の撒水設備等をして肥培管理を行えば更に面積を縮小することができる。